

## 「タケの室井」

岡 村 は た \*

私は昭和22年、県四が二中と合併し、兵庫高校になる以前から「タケの室井」を知っていた。それは扇の山の帰途、チュウゴクザサ群落の中でしきりに笹を採集し、東ねて風呂敷にくるくる巻いて脇にかかえて下山する人を見たとき、私はこれが「タケの室井」だろうと直感したことにはじまる。私も当時かなり熱心に何でも採集して覚えようとしていた時であった。

その後、当時勤務していた県四が二中と合併することがきまった。正式に今の兵庫高のところへ移動するまでの間に、新制高校の教科内容の講習会が5日間、東京教育大学で開かれ、県から、山本茂信、嵯峨山実治郎、室井綽、渋谷久雄の諸氏と私の5名が出席した。私は室井氏の顔で、岩手県人会館にとまり、大広間の床の間に寝たのを覚えている。この講習会がすみ、神戸へ帰ってくる頃には県四の荷物が二中にすべて届いていたので合併の劇的瞬間には出会わなかった。彼は私を学校中案内した。大変、きたない学校だと思った。その後、先の5人で県下の生物教師への伝達講習会をした。

当時、生研はとても盛んで、生徒は毎日残って何かをしていたので、私もかなりおそくまで生徒につき合っていた。そのうち、室井氏はひき出しから画用紙に毛筆で画いたスズダケの図を出して私にみせたので「下手な図ですわ」といった。まさかその後、竹笹の図を画かされるようになるうとは全く思ってもみなかった。それから数日後、彼はスズダケの標本を出してきて画いてくれといわれた。私は筆とペンで画いた。ペンの方が気に入った出来だったようだ。その後、彼は毎日のように、次々と標本棚から腊葉を出してきて私に画かせた。かくして、昭和31年、彼の第一作「竹と笹」が井上書店から出された。私は当時井上から画料をもらったのを覚えている。彼の40代前半の時代だった。彼の植物の形態を見る目は鋭かった。筍が伸び竹の皮が落ち、枝がまだ出ていない頃の各節にみられる芽の大小関係の法則性の発見や、双枝竹の芽の並び方から原因の分析をするなどその観察眼の鋭さには驚かされたものだ。しかし、私はとくに竹笹に対して興味はわかなかつたし、竹笹の種類の名も覚えた記憶はなかった。かくして私は20代、30代のエネルギーを竹笹の図と写真についやした。

私の線画は細かい細工物の得意であった父からの遺伝

を室井氏によって伸ばされたのだから、いってみれば教育されたということに当てはまるだろう。この間「兵庫生物」の校正（これも父が私の小学校4年生ごろから自分の本の校正を私に手伝わせていたので馴れていた）や、学校園と校外指導、植物観察事典、動物観察事典、料理材料事典（六月社）などの共著を出した。

昭和27年、室井氏は内地留学したが、京大植物北村教室には正式許可がおりず、神大広瀬教室に許可され、実際は京大に行っていた（これは北村氏の恩師小泉源一氏を考慮された封建的なものだったろうと推察する）。彼は当時、かなりの勢いでクマザサ属（*Sasa*）の検索を作っていた。しかし、この年を境にこの検索表作りはやめた。「無駄なことだ」と彼は本気でいっていた。私は実は極く最近（昭和60年春）1か月かけて、杉本の樹木検索誌の中の「室井のクマザサ属の検索」と、鈴木貞雄氏の日本タケ科植物総目録の中の「和文部分のクマザサ属検索表」とをくわしく比較して驚いた。それはこの属の検索表中に用いられる和名はもちろん、学名が重なっているものがわずか3、4種にすぎないことがわかり、両氏がクマザサ属の中での主な種類としてみとめているものにかかなりの隔りのあることがわかったことであった。すなわち、何を種（sp.）とし、何を変種（var.）とし、何を亜種、品種（subsp., form.）とするかはかなりの見解の相異があるらしいことである。*Sasa* 属は日本、樺太の原産で、複雑な日本の地形の中にあつて、長年月にわたり分化と交雑をくりかえしているグループであり、さらに、遺伝学的同一クローンの個体の把握がしにくく、図体が大きいために栄養体の特徴が握みにくいこと、これに加えて開花が稀なことなどが原因で、今までの分類学者がさけてきたグループの1つであることがよくわかった。

話は前後したが、昭和36年の秋、室井氏の学生時代の友人、林弥栄氏から彼に「来年は旧制学位の最後の年だから、論文を出さないか」という誘いがあった。その後、急速に彼の周辺がいそがしくなった。10月23日、恩師村山氏がはるばる北大から兵庫高に来られた。この日はおそらく彼にとって記念すべき日だっただろう。その当日の写真は私が出版した「兵庫高かぶとがに8号」にある。その後も何回か来られたし、彼も何回も北大に出掛けた。はじめは広大・理を目標にしたが、そこは植物学雑誌に出していなければ受け付けないという。そこでやはり村山

\* 聖和大学 教育学部、教授

氏のおられる北大農ということになった。その年の12月までは“竹と笹”の本にこだわり、この手直しをしていたが、こんな姑息な手段でかたづけられる相手ではなかったのである。そこで、私は目次からやり直した方がよいと思った。まず、農学むきの目次を室井氏の意見を聞きながら作った。この中へ、これまで彼が書いたものを論文調につくり直し、不足するところを彼が新たに作るという形をとった。12月下旬には花のことを勉強して不足を補った。冬休みは1日も休まなかった。乾燥標本から花だけをとり出し各属の模型をかくこと、一花を解剖して鱗皮の永久プレパラートを作り写生図を作った。論文の骨格はきましたが、農学部に出すにはそれなりの利用方面の内容が必要だった。彼が書いた下書きを、授業のあい間に1日50枚という早さで清書し、また加筆し、また清書をくりかえした。この論文には私が書いた竹笹の写生図の多くが入れられた。残念なことにこの論文の版は急いだためか劣悪で、のち、主治医5巻1～8巻6号の表紙裏の“竹類図譜”や、北隆館発行の“竹笹の話”に挿入された図版は原図が同じであるにもかかわらず、こちらの方が数段すぐれた凸版の出来ばえで、私としてはここに是非記しておきたいことである。翌37年3月下旬、彼は幸い、北大から農学博士の学位を取得した。

この期を境に竹の世界では文化や利用のことに興味をもちはじめた。また、草木を楽しむ会を設立し、また、多くの本を発行して、学者の発見した事柄を大衆に普及することにエネルギーを費やしている。しかし、素人の協力には必ず名を付して発表しているが……。室井氏が学位を取得した前後から私は斑入りに興味をもった。それから今日まで20年あまり、竹の開花生態や斑の形態発生遺伝学的見方などの多くの調査研究を行い、富士竹類植物園報告に発表した。30年前に始められた室井氏が園長である富士竹類植物園は次第に栄え、1985年に資料館が建った。京都の洛西竹林公園とはまたちがった味のものにしたいと考えている。竹笹の分類学の歴史がわかるような資料なども集めたいと考えている。

それにしても牧野、中井、小泉、内田の時代に多くの笹の名が登録された。これをもとに現時点で、分布範囲や他種との混生状態を調査するとどうなることか。Sasa 属、Sasaella 属は鈴木氏、室井氏のいずれかが両方の意見のわかりやすい比較表をつけて整理してもらうわけにはいかないだろうか。近時、竹笹の世界でも系統研究に近代手法がとり入れられ、種間距離が云々されるようになったが、私は若い人達と協力して笹類の日本における種のひろがり、その間の系統関係を少しでも明らかにしたいと考えている。

最近、私は富士竹類植物園のあふれるばかりの笹の緑の中で、少なくともここにある笹だけは理解しておかね

ばなるまいという気がしている。竹以外で学位を取得した私ではあるが、最近何かと竹の仕事が多い。ふりかえてみるとB5ノット30冊に竹の記録があり、未整理のdataも多い。これらは主として昭和39年から55年の15年間で、関東、東海、近畿、中国、四国、九州に何十回も調査研究に出掛けた記録である。これらはすべて笠原、岡村、田中で行ったあと、測定は私が行なった。

最近富士竹類植物園での実験と地方での現地調査とが並行して行われるようになった。私は今後も室井氏が園長である富士竹類植物園を発展させることに協力したいと考えている。

あとがき

最近、バッグの整理をしていると平畑先生宛にした封筒を発見、中にこの原稿が入っていたのでおくればせながら兵庫生物に投稿する。“兵庫生物”のますますの発展を期待する。